

TruPhase の導入(22)  
—MQA 音源の音質確認(2)—

1. はじめに

前報(21)に引き続き、MQA 音源を聴いてみます。

2. TruPhase の試聴方法

これまでの経過を踏まえて P&G のフェーダーに替えてパッシブアテネーターの TruPhase を使用し、RCA 入力→RCA 出力とします。なお、AACU-1000 は TruPhase の入力側と出力側にセットします。

音源は fidata HFAS1-S10 に収納し、USB 経由で Brooklyn DAC+ に送り出します。

fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→→(アンバランスケーブル)→(AACU-1000)→TruPhase→(AACU-1000)→(アンバランスケーブル)→Langevin 6V6pp

音源は、ディスクグラフィのページで報告してきた、ユニバーサルミュージック社の一連の MQA 音源の中から選択します。

ブルックナー 交響曲第 4 番《ロマンティック》

カール・ベーム指揮ウィーンフィル

Universal Music UCCG-40005

マーラー 交響曲第 5 番

ゲオルグ・ショルティ指揮シカゴ交響楽団

Universal Music UCCG-40007

モーツァルト 交響曲第 40 番・第 41 番

カール・ベーム指揮ベルリンフィル

Universal Music UCCG-40071

ドヴォルザーク他 チェロ協奏曲ロ短調作品 104 他

ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ (チェロ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

Universal Music UCCG-40078

ブラームス ピアノ協奏曲第 2 番変ロ長調作品 83

ヴィルヘルム・バックハウス (ピアノ)

カール・ベーム指揮ウィーンフィル

Universal Music CCG-40010

### 3. TruPhase の試聴結果

ブルックナーの交響曲第 4 番は、正相では定位が曖昧で、騒がしいですが、逆相にすると各パートの音像が明瞭になり、定位がしっかりしてきます。MQA のデコード表示は 352.8KHz で、以前の印象よりブルックナーらしい細やかな表現と厚みのある表情がともによく出ています。

マーラーの交響曲第 5 番は、正相では音像がぼやけ気味ですが、逆相にすると各パートの音像が明瞭になり、定位がしっかりしてきます。MQA のデコード表示は 352.8KHz で、以前の印象よりこの曲の荘重な雰囲気が出ています。

モーツァルトの交響曲第 40 番・第 41 番は、正相では音像がぼやけ気味で、過度な広がり感がありますが、逆相にすると各パートの音像が明瞭になり、定位がしっかりしてきます。MQA のデコード表示は 352.8KHz で、以前の印象より、モーツァルトらしい流麗な雰囲気が味わえます。

ドヴォルザーク他のチェロ協奏曲は、正相では音像がぼやけ気味ですが、逆相にするとチェロの音の芯がしっかり出てきます。MQA のデコード表示は 352.8KHz で、以前の印象より、ロストロポーヴィチの艶のあるボウイングの様が味わえます。

ブラームスのピアノ協奏曲第 2 番は、正相ではピアノの音像が大きくなりすぎ、過度な広がり感がありますが、逆相にするとピアノや各パートの音像が明瞭になり、定位がしっかりしてきます。MQA のデコード表示は 352.8KHz で、以前の印象より、バックハウスらしい豪快な演奏が味わえます。

### 4. まとめ

fidata HFAS1-S10 収納のハイレゾ音源の再生において、それぞれの持ち味が発揮されました。また、位相の把握も十分に可能でした。

以上